

# そして遊戯は続く

井田和樹

## そして遊戯は続く

---

風が吹いている。誰の頬をも緩ませずにはいられない初秋の爽やかな風が、路面のレンガを濡らす血溜まりに細波を作り、横転したパトカーから吹き上がる黒煙を散らし、爆風で焼け焦げた並木にわずかに残された葉を揺らした。

遠く遥かからサイレンが聞こえる。小高い丘の上に申し訳程度に作られた小さな公園で、ただ一人ブランコを漕いでいたその少年は、それを聞いて心地良さそうに目を細めた。柔らかそうな茶色の巻き毛に、茶色の瞳。白い半袖シャツに黒い半ズボンから伸びる手も足も、折れそうなほどに白く細い。

頭上を仰いだ彼の目が、遥か上空を横切っていく黒い点を捉えた。

「……そろそろかな？」

雲一つない蒼穹を一機の無人機が飛ぶ。音もなく悠然と滑空する機体の横腹には極太ゴシック体による〈陸上自衛軍〉の文字。

機首のカメラと複合センサーが、地表の〈聖ルテチア総合メディカルクリニック〉と正門に記された瀟洒な6階建ての建物を捉え、ロビーの自動ドアを突き破って停車しているトレーラーを捉え、正面玄関にいくつも設置された鈍く輝く自動機銃を捉え、そして屋上で目と口を粘着テープで塞がれ後ろ手に縛られたまま跪いている医師たちと看護師たちを捉えた。

しばらく無心にブランコを漕いでいた少年が、若い女性の靴音に気づいて振り向く。

「……お久しぶりです」

傍らに立った人影に向かって、彼は心底嬉しそうな笑みを浮かべた。

「やあ。よく一目で僕だってわかったね？ この前に比べると、ずいぶんイメージを変えたつもりなんだけどな」

「わかりますよ。『男でも女でも子供でも老人でもなく、その真の姿は君たちの目から常に隠されている』と以前あなたは言いましたから。それに、こんな時こんな場所で遊んでいるのはあなたくらいです」

「そうなの？ だってここは公園だろ？ 子供が遊ぶ場所なんだろ？」

「最近の子供は、ブランコでなんか遊びませんよ」

女性士官用の濃紺のコートに身を包んだ女は微笑すると、少年の隣のブランコに腰掛けてからスカートの裾を直した。

「そろそろ来ると思っていたよ。穂摘悠理中尉」

「大尉です。本日付けで任官されました」

「そうか、出世したんだ。おめでとう。君の経歴と成し遂げた成果を考えれば、むしろ遅いくらいじゃないかな？」

「そうは思いませんけど……上の方でもいろいろと意見があったらしくて」

少年はブランコを漕ぐのを止めた。「雰囲気が変わったと思ったら、髪形を変えたんだね。似合ってるよ。……あれ、これってセクハラになるんだっけ？」

悠理は苦笑しながら、ボブとセミロングの中間ほどに切りそろえた髪を押さえた。「そんなことはありません。ありがとうございます」

少年は地面を蹴って、軽くブランコを一漕ぎした。「来てくれて嬉しいよ。……正直、会ってくれないんじゃないかと思っていた」

悠理の眼差しが、遠くを見つめるものになった。「迷いました」

「でも来てくれた。本当に嬉しいよ」

数秒の間、二人は黙って遠くから聞こえるサイレンの音に耳をすませた。黙ったまま二人で、青空を背景に立ち上る遠くの黒煙を眺めた。

先に口を開いたのは悠理の方だった。「……一つだけ、質問があるんです。モーリッツさん」

「相変わらず『さん』づけなんだね、君は。僕の話は呼び捨てでいいって言ってるのに…  
…ま、そういうところが君らしいけど。で、何？」

微かに躊躇ってから、悠理は口を開いた。

「……どうしてあの時、私を助けたのですか？」

幾分かわざとらしく、モーリッツは首を傾げた。「助けたいから助けた。それじゃ駄目かな？」

「あなたに命を救われて、私は見たくないものをうんざりするほど見せられ、信じたかったものが全く信じられなくなりました。仲の良かった人も良くなかった人も、仲は良くななくても評価したかった人も、まったくできなかつた人も、一切の区別なく死ぬところを、幾度も目の当たりにしました。私だけがいつもその例外でした。そう、いつも私だけが」

しばらく黙って、悠理はモーリッツを見つめた。モーリッツも悠理の視線を受け止めた。

「答えがないというのなら、質問を変えます。どうして私を殺さなかったのですか？」

次に口を開いたのはモーリッツの方だった。

「ごめん。それについては本当にわからないんだ。僕自身にも説明はできないし、それを君に理解できるとも、してほしいとも思わない。ただ確実に言えることは、あの時に戻っても僕はやっぱり同じことをするだろうってことだけだ。そうとしか言えない。……ごめんね」

「……謝らないでください」

悠理は溜め息をついた。「あなたは本当に率直ですね。初めて会ったあの日から」

「嘘をつく必要がないからね」

悠理は心地良さそうにブランコを漕いでいるモーリッツの横顔を見つめた。次に彼方で立ち上る黒煙を見つめた。それから一度だけ、ブランコを前後に揺らした。

一息ついてから、彼女は意を決したように口を開いた。

「モーリッツさん」

「ん？」

「こうしてあなたと話ができるのも、もう今日で最後かも知れません。新しい配属先が決まりましたから」

「そうかあ……寂しくなるね。でもまあ、僕のせいで君の出世が遅れちゃ悪いし、宮仕えじゃ仕方ないか」

「今日ここに来たのは、ただ単に配属先が変わる、という話だけではないんです」

「というと？」

「私の上官……棟方を覚えていますか？ 彼は今、准将です」

へえ、とモーリッツは心底感心したような声を上げた。「あの人も出世したんだ！ そりゃよかった、おめでとうって伝えておいてよ。なまじ僕なんかと関わったおかげで、十何年も冷や飯を食わされてたんだからね、せめてそれくらいの役得はないと気の毒だ」

「伝えておきます。……彼の提出したレポートを元に特別予算が組まれました。上の方があなたの存在をどう解釈したのかはわかりませんが、少なくともあなたのことを『看過せざるべき脅威』とみなしたようです」

モーリッツはすっと目を細めた。「そうか。ようやく台風や地震並みの『脅威』とは認められたわけか。それでこそあっちこちに『種まき』した甲斐があったってものだよ」

「台風や地震を消滅させることができないのと同じように、あなたの存在もまた不滅のものなのかも知れません。ただ、だからと言って、あなたがもたらす災厄をそのままにもできません」

一瞬、モーリッツは耳元まで裂けるような笑みを浮かべた。「君たちは天気のごときものに、光や重力のごときものに、戦いを挑もうとしている。よくそこまで思い上がれるものだよ。皮肉でなく、そう思うね」

「少なくともあなたは血肉を備えたこの世のものでし、予算を組み、対策を練り、対処することはできます」

「そりゃいいや。楽しみだね。弩と投石器から君たちがどれだけ進歩したのか見てみたい。いやいや、進歩したのは君たちじゃないよ。道具の方さ」

「あなたは今後も続けるつもりなのですか？ その……」悠理は一瞬言いよどんだ。「遊びを」

「永遠に、かどうかはわからないよ。百年ぐらい続けてやめるかも知れないし、一億年続けてもまだ性懲りもなくやってるかも知れない。ようやく見つけた、神をも殺しかねない退屈から逃れ得る唯一の遊びなんだ、滅多なことがないとやめたくないね。ほら、君たちだってよく言うじゃない。『人は玩具』じゃなかった、ええと……ああ思い出した、『人はコンテンツ』って。あ、口が滑った。ごめんね」

「よくは言いません」悠理は溜め息を吐いた。「謝らなくていい、と言ったでしょう……そこまで悪びれていない相手に、何か言っても始まりませんから」

悠理はブランコから腰を上げた。「ごめんなさい。そろそろ行かないと」

「いいよ、仕事だものね」

よっ、と反動をつけてモーリッツはブランコから飛び降り、そして悠理と向かい合った。

「一つ、お願いがあるんだ。握手してくれない？ 嫌ならいいんだけど」

「……いえ。どうぞ」

差し出された悠理の手をモーリッツが握る。触れるような、優しい握り方だった。

「あったかいね。君の手は」

悠理は邪気のない笑顔を浮かべている少年を見下ろした。何かを言おうと口を開いたが、結局は何も言わずに唇を結んだ。それから礼を失さないように、そっと手を外した。

「それでは」

「うん。元気でね」

ひらり、とモーリッツが手を振る。悠理は丁寧に一礼すると、踵を返した。パンプスが枯葉を踏みしめる音がゆっくりと遠ざかっていった。

「……さて。僕もそろそろ行くかな。向こうの方もだいぶいい感じのようだし」

悠理の後ろ姿を見送ったモーリッツがブランコから飛び降り、うん、と一度伸びをした時。

ブランコを中心に、小さな公園そのものが半径十数メートルに渡って燃え上がり、砕け散った。空気を切る甲高い音は、その後にはやってきた。

「自己鍛造型弾頭搭載、GPS誘導の155ミリ智能化砲弾です。あなたにどこまで効果があるかは疑問ですけど……でも、挨拶代わりとしては悪くないでしょう？」

立ち去ったはずの悠理が、熱風に髪とコートの裾を揺らしながら呟く。

「……言ったはずですよ。こうして言葉を交わせるのもこれが最後だ、と。もう私たちの間に、言葉など必要ありませんから。それとも、このまま帰れると思ったのですか？ あれだけ死を撒いた後で？ それ以上の人生を台無しにした後で？ あなたは命ある限り、今後もそれを続けるつもりなのには？」

彼女の視線の先で、公園が空気ごと燃え上がっていた。

「私からのちょっとした平手打ちと思ってください。それくらいはされても仕方がない、ということは、あなただってわかっているはずですよ？」

そして炎と熱風の中で、何かが蠢き始めた。

「これはまた、ずいぶん勇ましくなったもんだ……そうだよ、そうこなくっちゃ！」

真っ黒に焼け焦げた土と、捻じ曲がった遊具の間に横たわった「それ」の口にあたる部分から、気の触れたようなけたたましい哄笑が噴出した。

「久しぶりだあ！ 何百年かぶりだあ！ 肉体を穿たれ、焼かれ、潰され、切り刻まれるこの感触！ 身体の一部を『持っていかれる』この感触！ なるほど大したものだ、君たちが猿から進化して得た同族殺しの道具は！ 大したものだ、君たちの昏い情熱は！」

炭化した顔の中で奇跡的に原形を保ったピンク色の唇と、真っ白い粒のそろった歯の間から、大量の汚水が下水を流れるような轟音とともに、どす黒く異臭を放つ粘液に包まれて、鱗と、牙と、爪と、翼のようなものをそろえた、巨大な質量を持つ何かが這い出してきた。

「僕をこの世から滅するまで諦めないつもりか！ そうだよ、それがなくて、どうして『人間』の顔をしていられるものか！ 君たちを人間たらしめているものが、そこにあるというのに！」

ああ、そうだよ……僕は心の底から愛しているとも、君たちの、その愚劣さと力を！」

「タール状の成分不明物質、なおも質量増大中。……155ミリ砲弾の直撃ですよ？ あの熱と衝撃をまともに浴びてまだ動くなんて、ウィルスやバクテリアでも無理な芸当ですよ。一体どういう生き物なんです？」

モニターを注視する奈良橋一哉大尉の声は、微かに上ずっている。

「原子レベルから肉体の再構築が可能、と『本人』から直接聞いたことがある。生体部分へのダメージは、たぶん意味がないね」

チートですか、と坂本剛司大尉が呆れたように言う。

「聞きしに勝る化け物ですね。そうとわかっていて、一発何千万円の砲弾を撃つわけですか」

「技研の顔も立てる必要がある。実戦データが得られるなら向こうが金を出しかねない様子だったしね。自腹で払え、と言われたらもう少し考えたところだが」

「なんだか馴れ合いみたいですね」

「そう、ある意味ではね。僕たちは彼の『地獄のおままごと』につき合わされている、と言えなくもない。問題はそれを『しかと』すれば、おびたしい数の人命が失われるということだ」

「まさに国民の盾」皮肉のこもった口調とは裏腹に、宮迫小鈴大尉は食い入るような眼差しでモニターを見つめている。「でもまあ、何をやればいいのかはだいぶわかってきましたよ。そのふざけたガキンちょの『地獄のおままごと』に付き合っただけでいいんでしょう？ 無人機と遠隔火砲で」

「その通りだ。さて諸君」

大隊長一棟方志郎准将は指揮車内の全員の顔を見回した。「改めて紹介しよう。これが君たちの『敵』だ」

「否も応もありませんよ」奈良橋が溜め息を吐く。「あなたには恩義もありますし、古巣へ戻ってももらえるのは冷や飯ぐらいですからね」

「今さら決意のほどを確かめるなんて、そりゃなしですよ、大隊長」坂本は童顔に似合わない精悍な笑みを浮かべた。「戦車の中でいつ来るかわからない『隣国の脅威』とやらの備えているよりは面白そうだ」

「不謹慎ですよ、坂本大尉……」

「悪いか？ 動機がクズでもそれが任務と合致していれば、文句を言われる筋合いはないぜ」

「ツヨシもたまにはいいこと言うじゃないか。機甲部隊への未練は吹っ切れたらしいね」

「うるせえな。そういう宮迫はどうなんだよ」

「こいつをほっときゃ人が死ぬし、警察には荷が重過ぎるんだろ？ なら考えるまでもないじゃないか。怪獣退治は軍の仕事って相場が決まってるからね」小鈴は事もなげに言った。「少なくとも台風や地震よりは相手がしやすそうだ」

「私ももう決めました」橘美佳中尉はきっぱりと言った。「ここでやることだって、以前の部隊と変わりありません」

「ありがとう。……さて、後は一人だけだな」

運転席から操縦手の通信が入った。『大隊長。穂摘大尉が帰還しました』

「わかった。通してくれ」

穂摘悠理は踵を合わせ、敬礼した。「報告します。穂摘悠理大尉、ただいま帰還しました」

「ご苦労様。『彼』への挨拶は済んだんだね？」

「はい。大隊長によろしくとのことでした。昇進おめでとう、とも」

「そうか。『すべて君のおかげだ』と伝えておいてくれ。機会があったら、でいい」

「はい」

悠理はモニターを見た。悪夢の産物めいたタール状の粘液は今や先ほどまで彼女がいた公園を覆い尽くし、ゆっくりと何かの形を取りつつあった。

「大隊長。あれは彼そのものではなく、彼の子供……分身、のようなものなのでしょうか」

「そう、彼はあれをまがい物のドラゴン、『偽竜』と呼んでいた。僕はかつてあれと同じものを、半島で見た」

そう言った時に棟方の目の中をよぎったものを、悠理は見逃さなかった。混じり気のない恐怖と憎悪だった。

「受勲式の会場からさうようにして連れてきてしまった。すまないね、本当なら盛大に打ち上げをするところなんだが」

悠理は微笑した。「お気持ちだけで充分ですよ」

そうはいきませんよ、と橘。「帰ったらお祝いです。これもう決定事項ですから」

奈良橋が頷く。「このところ待機につぐ待機ばかりで、皆さん気の張り通しでしたからね。穂摘大尉の好みではないかも知れませんが、僕らのためと思って少しでいいから付き合ってください」

坂本が肩をすくめる。「そうだよ、口実だよ。お前をダシにしてみんな飲みてえんだ。……まあ、ちっとはお前を祝ってやりたい、って気持ちだってあるんだぜ」

素直じゃない連中だね、と小鈴が笑う。「いつもあたしの『瓶詰め脳』を援護してくれてるんだろ？ こんな時に祝わないでいつ祝うのさ、相棒」

「……ありがとうございます、皆さん」悠理は一礼した。「大隊長、始めます」

「うん。では諸君、なすべきことをなそう」

はい、と全員が一斉に頷く。悠理はコンソールに座り、すでに励起状態の非侵襲式ブレインマシインターフェイス——〈茨冠〉をゆっくりと頭に乘せた。

「さあ悠理、僕を思いっきり叩き潰しておくれ！　僕が君を思いっきり叩き潰すその前に！　早く、早く、一刻も早く！　待ちきれないよ！　さあ早く！　早く！　早く早く早く！」

あなたがどうしてここまで私に固執するのか、私のどこにそんな価値があるのか。いくら考えても答えはわかりませんでした。でも今ならわかります。私はあなたの「お気に入りのおもちゃ」だったんですね？　わかった時は呆れました——それ以上に呪いもしましたけど、あなたはそもそも人ではないのですから、それを責めても始まりません。誰だって自分の「お気に入り」を

誰かに壊されたら腹を立てますから（私も子供の頃に大切にしていたおもちゃのステッキを弟に壊されて、両親がびっくりするほどの大喧嘩になったことがあります。どうしてあんなものぐらいで相手が泣くまで許さなかったのか、と今なら思いますけど）。ただ、あなたの場合はそれが極端すぎ、周りへの影響が大きすぎました。それだけのことなのだと思います。だからあなたは私が軍から放逐される、あるいは害されるような企てすべてを、時として物理的に、潰してきたのですね。お気に入りのおもちゃを取り上げられまいとむきになる子供のように。でも、そんな心配はしなくてもよかったです。軍は私がここから離れることを許しませんし、私と家族の生命と安全が軍に（と言うよりは、棟方准将に）保証されている以上、選択肢自体が私にはありませんから。たぶん私の方が先に死ぬでしょうけど、それまではあなたの「おままごと」に付き合ってください。それが私の命を救い、人生を狂わせたあなたへの、私なりの恩返しであり復讐です。モーリッツと名乗るあなた——大丈夫ですよ、私はもうどこにも行きません。ずっとここにいます。ここであなたと、あなたの生み出すものすべてを殺して、殺して、殺し続けます。命ある限り。死が二人を分かつまで。



## そして遊戯は続く

<http://p.booklog.jp/book/43334>

著者：井田和樹

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shadowontheida/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43334>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43334>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.